



内ポケットにノート 嵐山光三郎

いつも内ポケットに小さいノートを入れている。印象メモである。職業から、思いついたことをすぐ書きこめる習慣がついた。たとえばひとりで夜行列車に乗っているときは、車窓の風景、弁士、駅員の様子、珍しい客、網棚の荷物、レールがきしむ音、トンネルのなかの気配、学生の姿など思いつくままにメモしておく。

小さいノートはたちまち文字で埋まる。絵も描く。絵こいたって、絵のメモだからマンガである。駅弁をスケッチしておかずをひとつひとつ描いておく。これをほめてくれる。二時間や三時間は退屈しない。

人に会って話をきくときもメモをとる。メモをとりはじめると、話すほうは、なにか面白くないことを言わなくてはいけない、とこじこりになって、とっておきの話をしてくれる。

メモをとりはじめると、横にいる別の人までが話を始める。しかし、その話がつまらないときはメモをとらない。そうすると、相手がいへらなくなるから楽である。

親しい友人と居酒屋で飲むときも、いいアイデアが出るとメモをとる。だから話しているのより、メモをとったときのほうが話がうまくなる。ほかがメモをとると、相手もノートをとり出して書き出して、メモのとりあいだ、周囲の人からみると密議しているように見える。だから、居酒屋の筆談である。

「こつこつといくつもの本のアイデアが生まれた。」

「やたらと連載原稿をかかえているから、朝から晩まで原稿用紙にこらめっこで、一週間、だれにも会わない、なんてときがある。書くか資料を調べているかのどちらかだ。」

「そのうちに煮つまって、頭のなかでノンノンと虫が飛び、耳鳴りがして、なにがなんだかわからなくなる。眠っていても原稿を書く夢を見て、書きあげたつもりが夢だったと知ってダアとなる。」



嵐山光三郎(あらしやまこうざぶろう) 静岡県生まれ。国学院大学国文科卒業。平凡社に入社し、『別冊太陽』編集長、『太陽』編集長と歴任。退職後、作家として活躍する。88年『素人庖丁記』で講談社エッセイ賞受賞。00年『芭蕉の誘惑』でJTB紀行文学大賞受賞。近著に『日本語で』(集英社文庫)、『寿司問答 江戸前の真髓』(ちくま文庫)など。

銀座・伊東屋 ティーラウンジにて

「そのうちときは、居酒屋へ行って飲んだり旅に出るようになっていく。酒を飲んでいるときはメモなんかとらなきたい、という気がするが、くせでついノートをとりだす。」

「旅さきでは文具店に行く。学校の前に小さな文具店があり、ノート、鉛筆、のり、スケッチブックなどを売っている。あれもこれもほしくなると困るが、小さいノートを一冊だけ買うことにしている。」

「小学生のとき、運動会の賞品にノートを貰った。表紙に「賞」と印が押してあり、晴れがましくて使えなかった。そのノートは、使わないまま、どこかへいつにしまった。」

「ノートにメモをとるのは、印象を文字化する作業で、書くとき頭のなかに記憶が残る。そういうエキスがたまると、指さきから言葉が出てくる。指がつぶやく。頭で考えているうちは自分の言葉がみつからない。ぼーっとしていても指さきから言葉がもれてくればもう「自分のもの」なのだ。」

Let's think together!

地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩

古紙利用率をさらに上げて62%に

製紙産業では、『2010年度までに古紙利用率を62%に向上させる』という、新たな努力目標を定めました。

紙のリサイクルは、循環型社会の形成に向けて、推進すべき重要な課題です。製紙産業にも、その一翼を担う大きな役目があります。

ただし、古紙の利用拡大は、資源の有効利用の面で、大いに役立つ訳ですが、エネ

ルギー利用の面では、課題もあります。紙を作るために使用するエネルギーの総量は減少しますが、木材パルプに代替するので、その副産物であるバイオマスエネルギー(黒液注)が減り、化石エネルギーの消費が増加してしまいます。

そのため、私達は、産業全体のエネルギー削減の対策強化を図りながら、古紙利用率を上げるという新たな挑戦を始めています。

注 黒液 木材パルプの製造工程で、木材から繊維を取り出した時に出る廃液。燃料として利用。



今回は3月30日号、大槻義彦さんです。